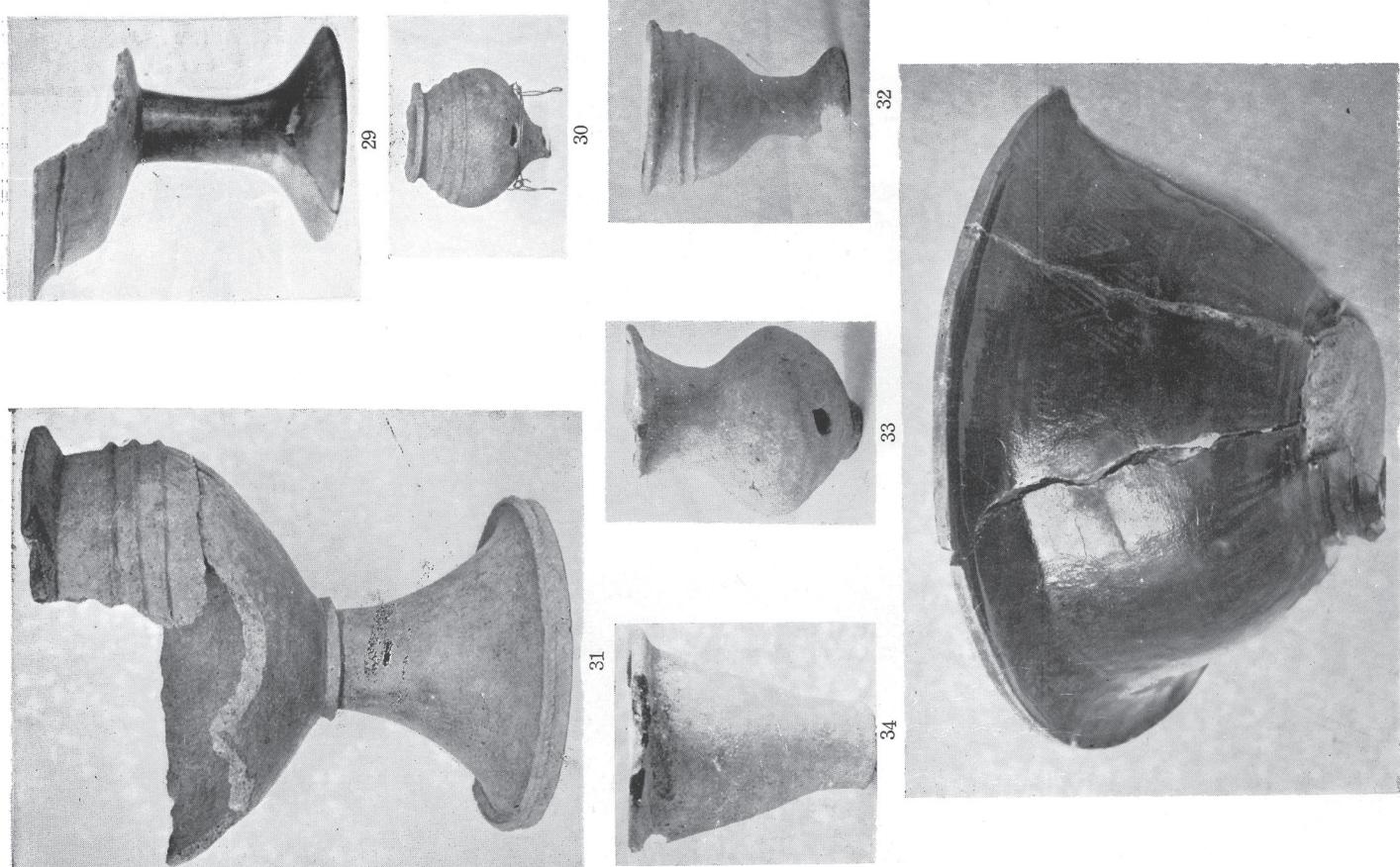
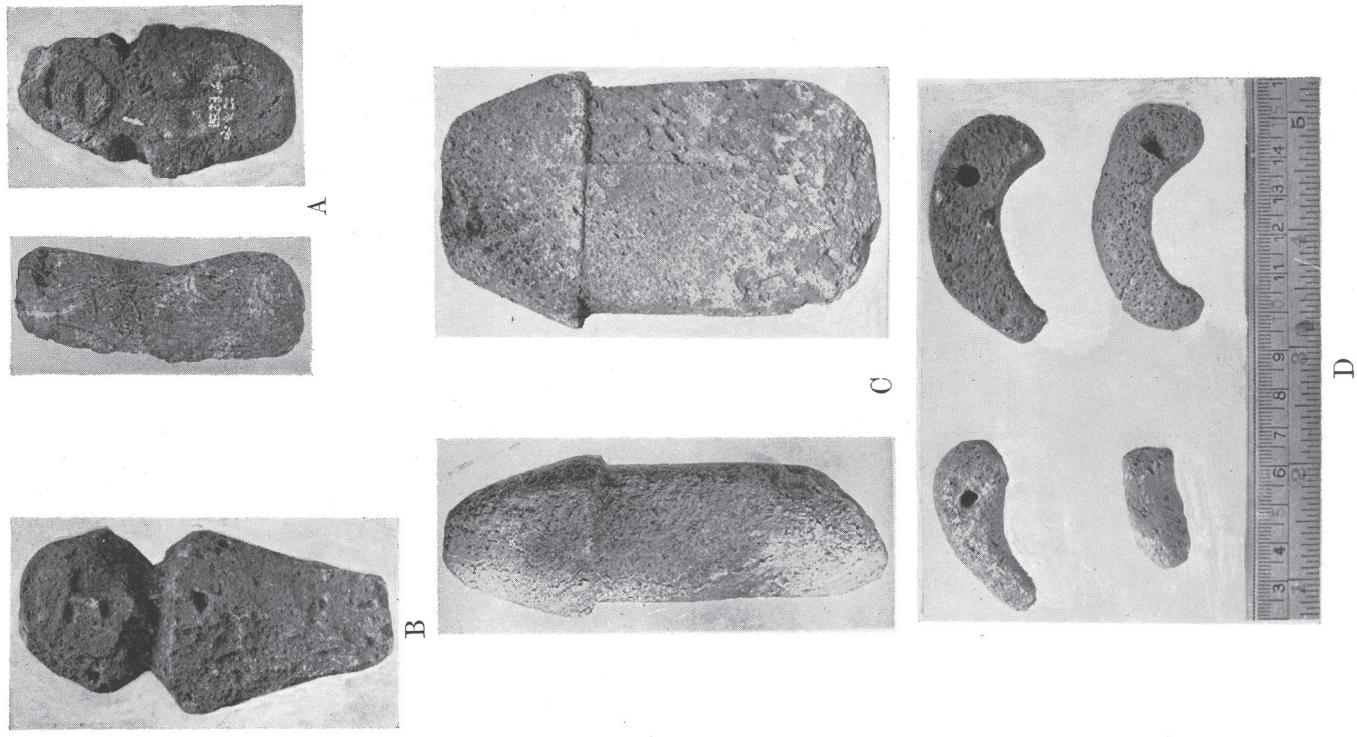


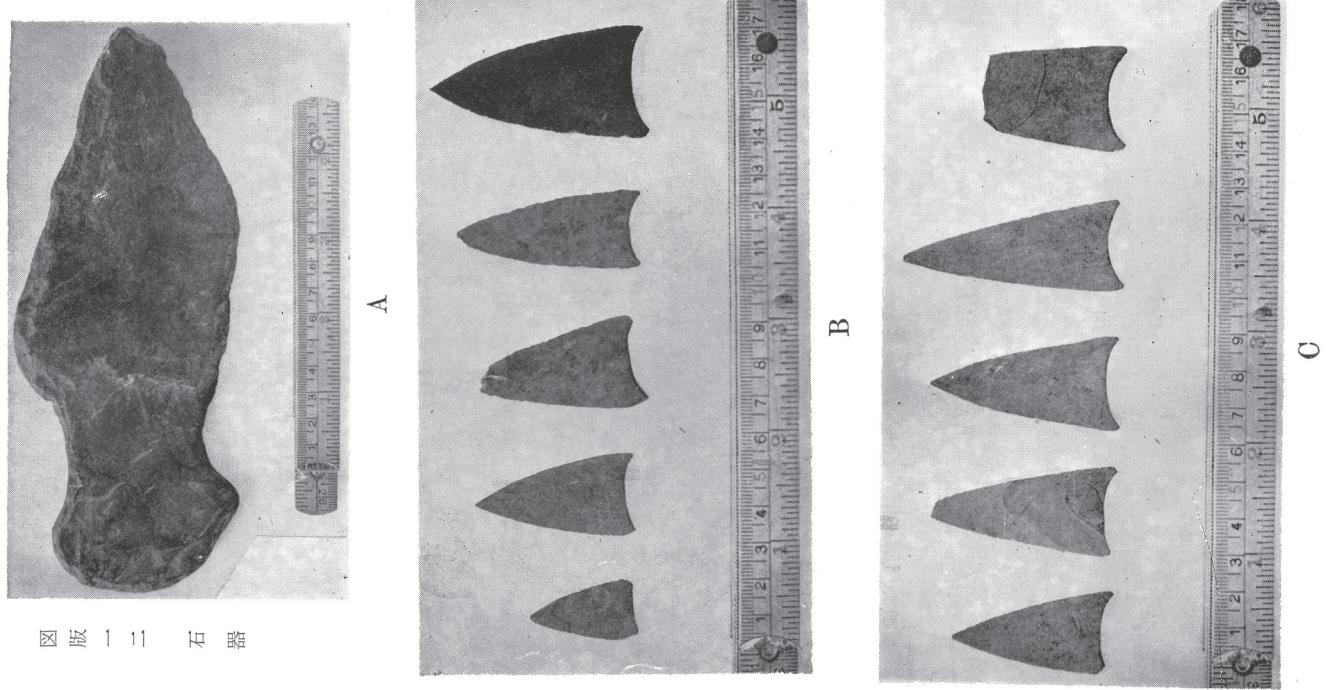
図版九 土器



図版一〇 土器



図版 一一 軽石製品



図版 一一 石器

山ノ口遺跡

河口真徳

(一) 山ノ口遺跡は鹿児島県肝属郡大根占町馬場山ノ口部落の南端に位置している。背後には山地がせまり、前には鹿児島湾を控えた狭い海浜で、現在水田となつてゐる。海岸線に沿つて古江から佐多に至る県道が遺跡を貫いて路南北に走つているが、遺跡の中心部は県道より西側海岸よりにある。

この地域は表土を除くと、非常に厚い砂層がみられ、海中で堆積したものと思われる。多量の砂鉄を包含していて砂鉄採掘地帯となつてゐる。遺跡の発見も昭和三十三年五月頃の東邦金属株式会社による砂鉄の採掘が動機となつたのである。発掘調査は、昭和三十三年十二月より翌年正月にかけて第一次発掘を行つた。

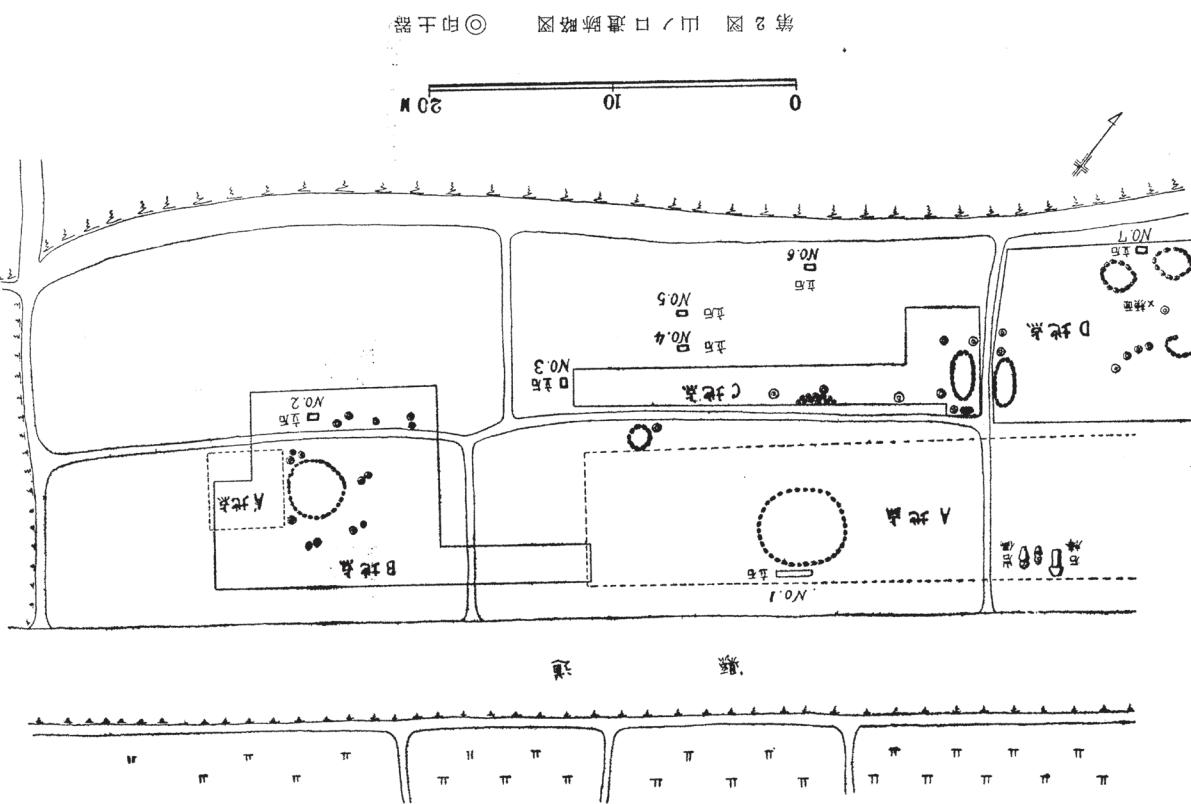
次いで遺跡滅失の恐れ等のために、昭和三十五年四月第二次発掘を行つたが遺跡が完全に発掘しつくされたわけではなく、昭和三十六年に至つて、再び東邦金属の砂鉄採掘が開始されると、遺物が続々出土し始めたので、昭和三十六年五月第三次の発掘を砂鉄の採掘と並行して行つた。その後も砂鉄の採掘は進行して遺物の出土がみられたが、発掘調査を行う機会を得ず現在この遺跡は完全に失われた

附編2

河口真徳 1962 「山ノ口遺跡」『立正考古』
第21号 立正大学考古学研究会



第1図 山ノ口遺跡附近地形図



第一次発掘の結果については、古代学及び鹿児島県文化財調査報告書(註1)に発表したので、第二次発掘の結果及び第二次発掘調査の概略を報告したい。

(二) 昭和三十三年の砂鉄採掘地は遺跡の東側にある県道脇の地点と、南端小地点である。(第2図 A地点、B地点)この地点は遺跡の重要な重要部を占めていたものと思われる。採掘当事者(註2)によると、東端に軽石製の石棒及び岩偶等が一箇所に出土し、その西南部約6mの県道脇の地点に軽石様の集積地が発見されている。軽石集積地は一側に約1mの安山岩質の石柱が横倒しの状況で出土し、附近に多数の土器、軽石製品等が出土している。その後の発掘状況から推定すると恐らく円形の配石地であつたものと思われる。(第2図 A地点)

第一次発掘では、前記軽石集積地の西南10mの県道脇の地点に、軽石様による径3mの円形の配石があり、これを囲んで壺型土器と、甕型土器が対をして置かれ、西北側には安山岩の約50cmの石柱を配し、軽石製曲玉、粘板岩製の磨製石錐等の出土もみられた。(第2図 B地点)

昭和三十六年の砂鉄採掘は前回より大規模で、ポンプを使用して機械的に採掘するものであったから、地表下10m以上以上の深所まで及んでいる。

この採掘でも多くの遺物が発見されたが、特に注意すべきことは、立石を四箇所(註3)発見したことである。何れも1ヵ月後後の石柱で、加工されたものであり、中には人体を思わせるようなものもあつた。この立石が遺跡の一部であることは殆んど間違いないと思われるが、他の遺物との配置状況は不明である。(第2図)

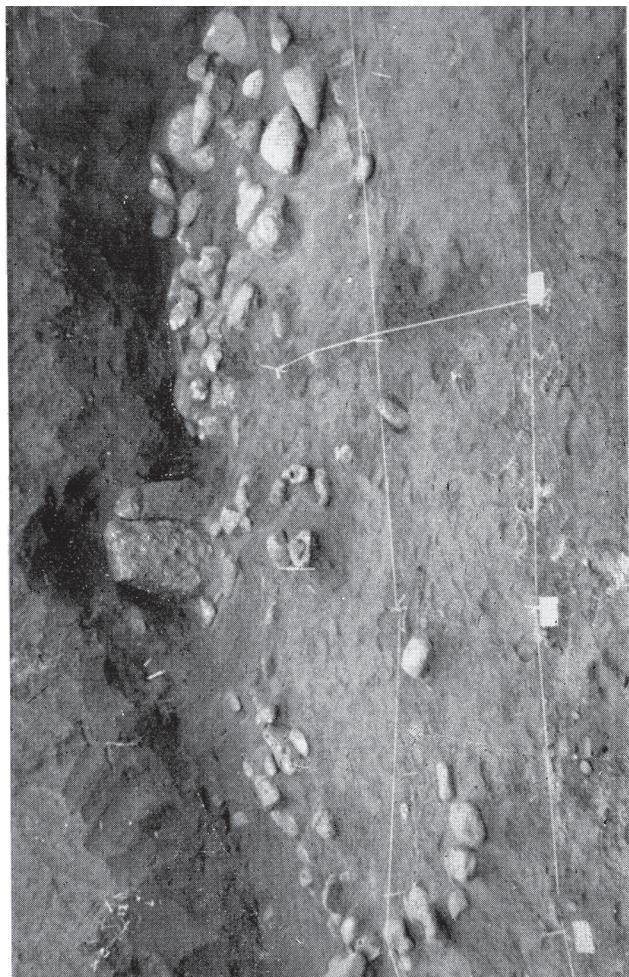
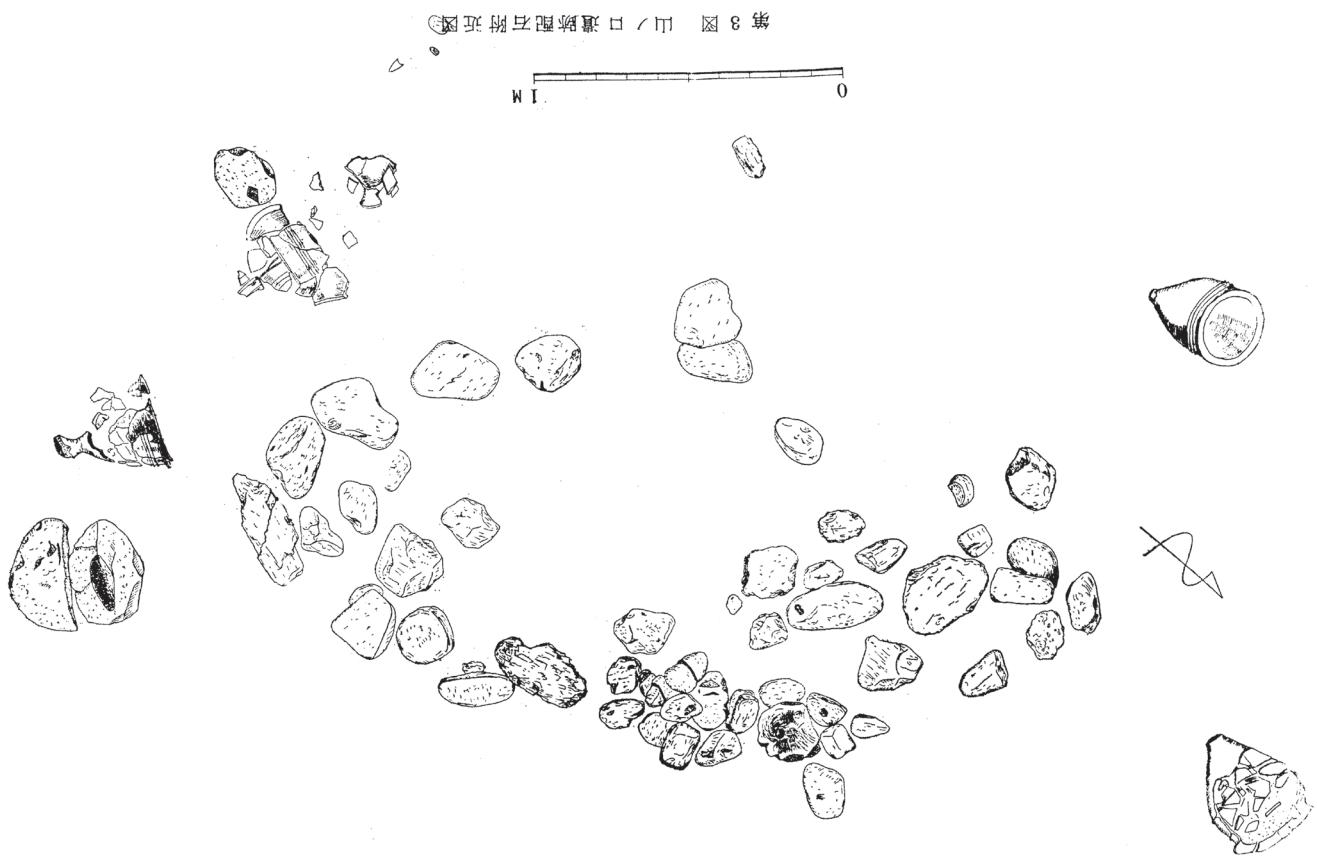
第二次発掘は昭和三十五年四月五日より七日に至る三日間で、遺跡のはば中央部にあたり、第一次発掘地点(第2図 B地点)の北方の地点である。遺跡の中央の壁に沿つて、NE 54° の方向に2m×1.8mのトレンチを設け、2m毎に九区分して南側より1区～9区とし、南側5区迄をIトレンチとし、北側残部をIIトレンチと名づけた。後このトレンチを南方へ4m延長してIIIトレンチとし、二区分して南より1区2区とした。

又、北側では9区より8区の半ばに及ぶ点から西方へ屈折して3m×4mのIVトレンチを設け区分为して東より1区2区とした。

遺物の出土状況は層位的には第一次発掘と相違がみられず、旧砂浜と思われる地表下約1mの砂層表面に遺物配列が見られた。B地点に近いIIIトレンチ及び、

(4) 山ノ口遺跡(河口)
 I レンチ 3 区までは遺物ではなく、発掘区域の中央部より北東へかけて遺構が見られ、I レンチ 5 区に軽石礫の集積地があり、これに沿つて壺型土器の破損度のひどいもの(第 5 図 6)がみられ、南西側にやゝ離れて I レンチ 4 区に、完形小形壺型土器(第 5 図 5)軽石集積地の北側には II レンチ 6 区に壺型土器の破片及び軽石製曲玉が出土している。これらの土器は軽石集積地を囲んで配置されたものと思われるが、軽石集積遺構はレンチの東側へ延びており、この部分は昭和三十三年度の砂鉄採掘地点(第 2 図 A 地点)に属しているため全貌をしきることが出来なかつた。

発掘地域の北東端には、II レンチ 9 区より IV レンチ 1 区へかけて橿円形環状の軽石礫の配石があり、長径 2.84 m、短径 1.60 m、軸は NW 26.5°、配石に用いた礫は加工したものもあり、東側の列中には中央に貫通する孔を有し、火熱を受け焼けたものもある。配石の長軸方向、東側には配石端より 30 cm の間隔をおいて 34 cm × 24 cm の軽石に、19 cm × 7 cm の橿円形で深さ 10.5 cm の凹穴



D 地区立石と環状配石図

(6) 山ノ口遺跡(河口)

を刻んだ様を配し、その上を加工した二箇の輕石で蓋し、更に薄板状の粘板岩で覆っている。この附近には丹塗りの輕石礫二箇が出土し、凹石の西側には甕型土器二箇(第5図3.4)を配し、西よりの甕型土器附近には磨製石錐一箇を出土している。

配石の北西端より1.2mをへだてた地点には、丹塗磨研された甕型土器一箇と、深い甕型土器一箇が、相互に1.37mをへだてて置かれている。(第5図1.2)環状配石の東南より南西方向へ約2mのIIレンチ7区には広口の甕型土器が出土し、IIレンチ8区には長さ8cmの円柱形輕石加工品の出土があり、又木炭の出地点もみられた。

第三次発掘は昭和三十六年五月五日より七月までの三日間砂鉄の採掘作業と並行して行つた。砂鉄採掘と共に遺物が出土したので、遺跡の煙滅を恐れて発掘を実施したのである。発掘の地域は遺跡の北東部に位置し、第二次発掘地点と、昭和三十三年の砂鉄採掘地点(第2図C地点及びA地点)に隣接して行つた。発掘の範囲は南北より北東方向へ12m、南東より北西方向へ10mの矩形に約120平方米の面積に及んだ。(第2図D地点)出土遺構の大略を記すと、前二回と同じく輕石礫による環状配石が四箇所に見られ、その一つは発掘地域の南の角にC

(7) 山ノ口遺跡(河口)

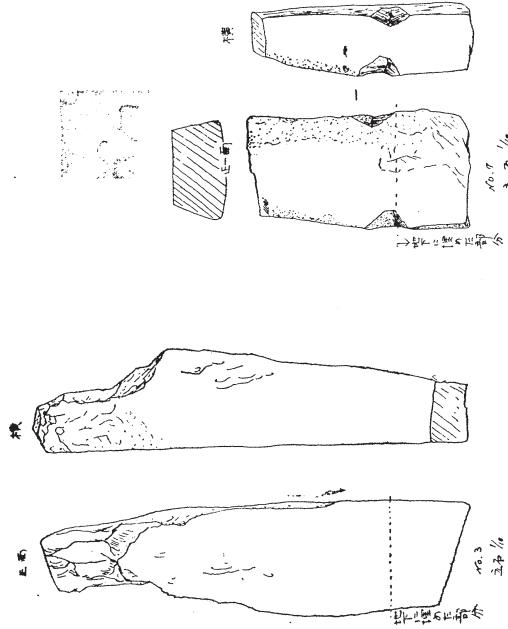
地点の環状配石と並行して、同様な橢円形環状配石を出土し、北西方向に甕型土器及び、小形甕型土器一箇つつを配している。

この配石と対せき点の北隅に環状配石二箇所が接近して並び、その中間、西よりに立石の出土をみた。基部より頭部が稍、小さいが、基部の幅3.7cm、厚さ2.5cm、高さは7.8cmの角柱状の立石で、下部より2.5cm程の箇所にえぐりを入れております、このえぐりの下端部あたりから土中に埋められていたものと思われ、土中の部分は風蝕を受けない。地表に露出した部分も、西北面の海岸に向つた部分は風蝕を著しく受け、遺跡に面した東南面は風蝕の度合が少ない。

(第4図A.7)二箇所の環状配石の東南側には小形の甕形土器一箇、顔面を思ひせる輕石加工品、曲玉状の加工品等を配している。残りの一箇の環状配石は、東北側よりの中央部より稍、東南部に偏して出土し、この配石より各々1m余の間隔をもつて、南北に弧状に甕型土器二箇、甕型土器二箇が、甕型土器を中心にして配列し、配石に最も近い甕型土器の下部からは、磨製石錐一箇が出土している。尚配石のうち北隅と南端の配石の中には、丹塗の輕石礫を一乃至三箇含んでいた。(第2図D地点)

土器の出土状況について三回の発掘を通して注目される点は、破損が少なく、破損したものもまとまつて出土している事、出土の際の土器の上面が風蝕を受け、甕型土器の場合には炭素が脱落し、下面は風蝕を受けて甕型土器は炭素付着部が残存していること、甕型土器は破損のため不明となつたものを除いては、何れも胴部に故意に孔をあけたことがある事等である。例外としてはG地点出土の丹塗研磨の甕型土器と、D地点出土の研磨された小形甕型土器に孔をあけた点があげられる。

三回にわたる発掘と、砂鉄採掘によつて判明した事実を総合すると、遺跡成立当時の砂浜につくられた大小の環状配合石群であり、各配石には立石を有する場合があり、時には岩偶、或いは石棒、凹石等を配した場合もみられ、土器、曲玉、石錐等を配置することはすべての場合を通じて行われている。砂鉄の採掘状況から判断すると、遺跡の範囲は、南西部はB地点が端であり、北東端はD地点より数米の地点と思われ、東南部は県道を境として、北西部は海岸に平行した崖を擡として、崖下には遺物の出土が見られない。従つて第2図に示すところは大体遺構の全貌に近いものと思われる。



第4図 山ノ口遺跡立石図

(三) 遺跡は現在水田であるために、地表は水平であるが、内部構造をみると、地層は西南方向にあたる海岸線へ向かつて緩傾斜を示し、大体四層を数え、この他に酸化鉄、火山灰等の断続した層が含まれている。

第Ⅰ層 表層 2.5 cm ~ 3.5 cm、砂質の土壤で耕土となつており、この層の下部に酸化鉄の富化層が厚薄さまざまの厚みを以つて断続している。

第Ⅱ層 褐色土層、耕土の直下の稍々砂の多く混ざった土質で、厚さも 3.0 ~

4.0 cm でよく発達している。この層の中に点々と火山灰の堆積層を含んでいる。

第Ⅲ層 黄褐色砂層 これは一部では下層の褐色砂層との境が明瞭でない部分もある。一部には 3.0 cm ~ 4.0 cm の厚さに発達した部分もみられる。

第Ⅳ層 褐色砂層、3.0 cm ~ 4.0 cm、下部の砂鐵層への漸移層である。この層の下部には火山灰の堆積層(コラ層)(註4)の薄い断続層を含んでいる。

第Ⅴ層 基盤、砂鐵を含む海成層で非常に厚く、恐らく 1.0 m を越えるものと思われる。遺物は多くは、この層の上部に乗つており、一部の遺物が少量この層の内部にくい込んでいるものがある。

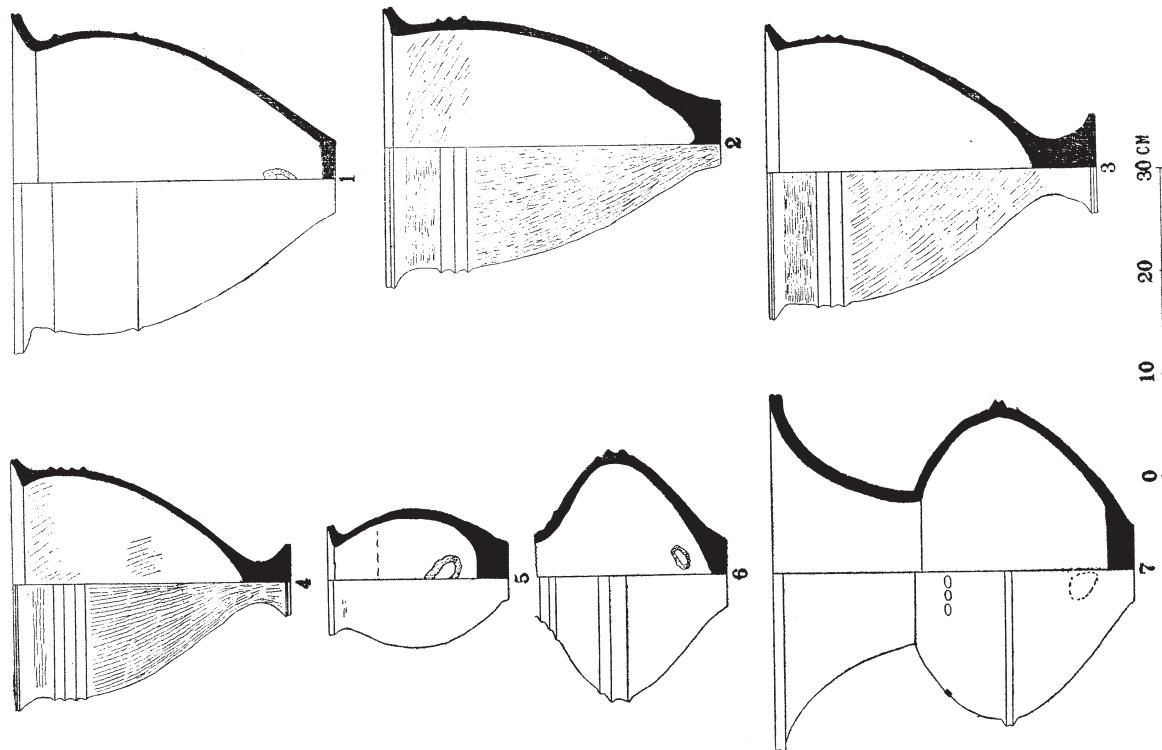
右の出土状況から見て、この層の表面が地表を形成していた時代に、遺跡は形成されたものであろう。

(四) 土器 ここに挙げる土器は C 地点出土の土器である。(第5図、昭和三十年四月の第二次発掘によるもの)

広口壺型土器(第5図7) 腹部の著しく張った偏球形の器体に、口縁部が朝顔形に開き、太く直立した頸部をつけた壺で、胴部には断面口唇状の凸帯を一条めぐらしている。底部は比較的厚く、安定した土器である。鏡磨仕上げで、内面も滑らかに仕上げ、ところどころ笠あとも見られる。同器形のもので胴部内面に青墨色の彩色を施したものもある。色調は紅褐色を帶び、焼成は堅く、胎土には砂粒及び雲母片をふくんでいる。

壺型土器(第5図6) 肩の張った土器で、胴部と頸部に断面三角形の凸帯を三条乃至数条めぐらしている。平底で中心部が薄く、重心は稍稍高い。頸部以上を欠くが、或いは B 地点及び D 地点出土の凸帯をめぐらした壺型土器(註5)と類似した形かとも思われる。ただこの土器は肩の張つている点が他と異つていて、注意される。

小形壺型土器(第5図5) 底部が厚く、胴部はゆるやかな曲線をなしており、口縁部はく状に屈曲している。内部は輪つきの跡をとどめている。



第5図 C地点出土土器

甕型土器 a (第5図3.4) この遺跡で最も多い甕型土器である。頸部に3~4条の凸帯をめぐらしている。刷毛目仕上げである。

甕型土器 b (第5図2) 頚部に稍々ふくらみをもつた、深い甕型土器である。頚部に他の甕型土器に見られる断面三角形の凸帯を三条めぐらし、口縁部はく状に外反している。平底甕形土器はこの遺跡では二例目であり、南九州では極めて稀である。刷毛目仕上げである。以上にあげた各土器は土質、色調等が共通で甕母を含有している点も同じである。

甕型土器 c (第5図1) 頚部が張った平底の土器で、口縁部は外反しており、断面三角形の凸帯を口縁部に近く一条、離れて頚部に一條めぐらしている。外面及び内面の上部三分一までは丹塗し、口縁部上面及び外面は縦に線磨きの手法を用いている。土器の仕上げは薄く、精巧で、他の土器と著しく異なる感じを与える。胎土は粒子がこまかで、内面の色調は黄色を示している。北九州にみられる城ノ越IV式(註6)と見てよい。

以上のC地点出土の土器群は、出土状況からみて同一時期に属するものと思われ、又B地点及びD地点出土の土器とも同一型式と認められる。その時期については須政式に近く、弥生中期でも古そうに見えるが、城ノ越IV式との伴出関係からみると、弥生中期の後半と思われる。城ノ越IV式土器の出土はこの遺跡では一例であつて、その形態、或いは手法等が南九州に一般にみられる土器と異つて、点からみると、北九州からの移入品のように思われるが、成川遺跡(註7)に若干の出土例があり、最近発見された川辺郡全峰町の高橋貝塚でも、その破片を発見しているので断定は出来ないが、その出土状況をみると、他の遺物に比べて、その出土量が極めて少ない点は注意すべきである。

その他の遺物、C地点出土の遺物としては、粘板岩製の磨製石鎌一箇、輕石製の曲玉一箇及び、長さ約7cmのまるい棒状の加工品が出土している。

(五) 三次にわたる発掘の結果この遺跡は、大略幅20m余長さ50m余の地域につくられた弥生中期の遺構であつて、その内容は、いくつかの環状配石の組み合せである。この遺跡が大根占の沖積平野の南隅にあたる位置にあることからして、この平野地帯に農耕を行っていた住民たちが残した共同の遺構であつたろうと思われる。

同様の類型もみとめられない現在結論を出すことは早すぎることもあるが、私の試論として述べるならば、遺構の状況、内容から考えて、農耕に関する祭祀の行われた遺跡ではないかと思う。

終りに三次に亘る発掘に対し、大根占町から援助を受けたこと、又地元高松の先生生徒の助力を受けたことを記して謝意を表すと共に、発掘に従事された神田三男、坂本貞夫、池水寛治、上村俊雄の諸氏の氏名をあげ、あわせて感謝の意を表したい。

(註1) 鹿児島県文化財調査報告書第七集、昭和三十五年三月発刊
(註2) 山ノ口在住の岩下次男氏外、岩下氏は三回の発掘とも協力して発掘に当った。

(註3) 第2図6.3~6.6の立石
(註4) 開闢岳の噴出した火山灰堆積層
(註5) 鹿児島県文化財調査報告書第七集補圖5の5・9・12の土器、古代学第九卷第三号の山ノ口遺跡の調査第4図5・9・12.
(註6) 日本農耕文化の生成、本文篇 3.福岡県城ノ越遺跡
(註7) 鹿児島県山川町成川彌生式立石墓 昭和三十三年中央文化財発掘

図版



①

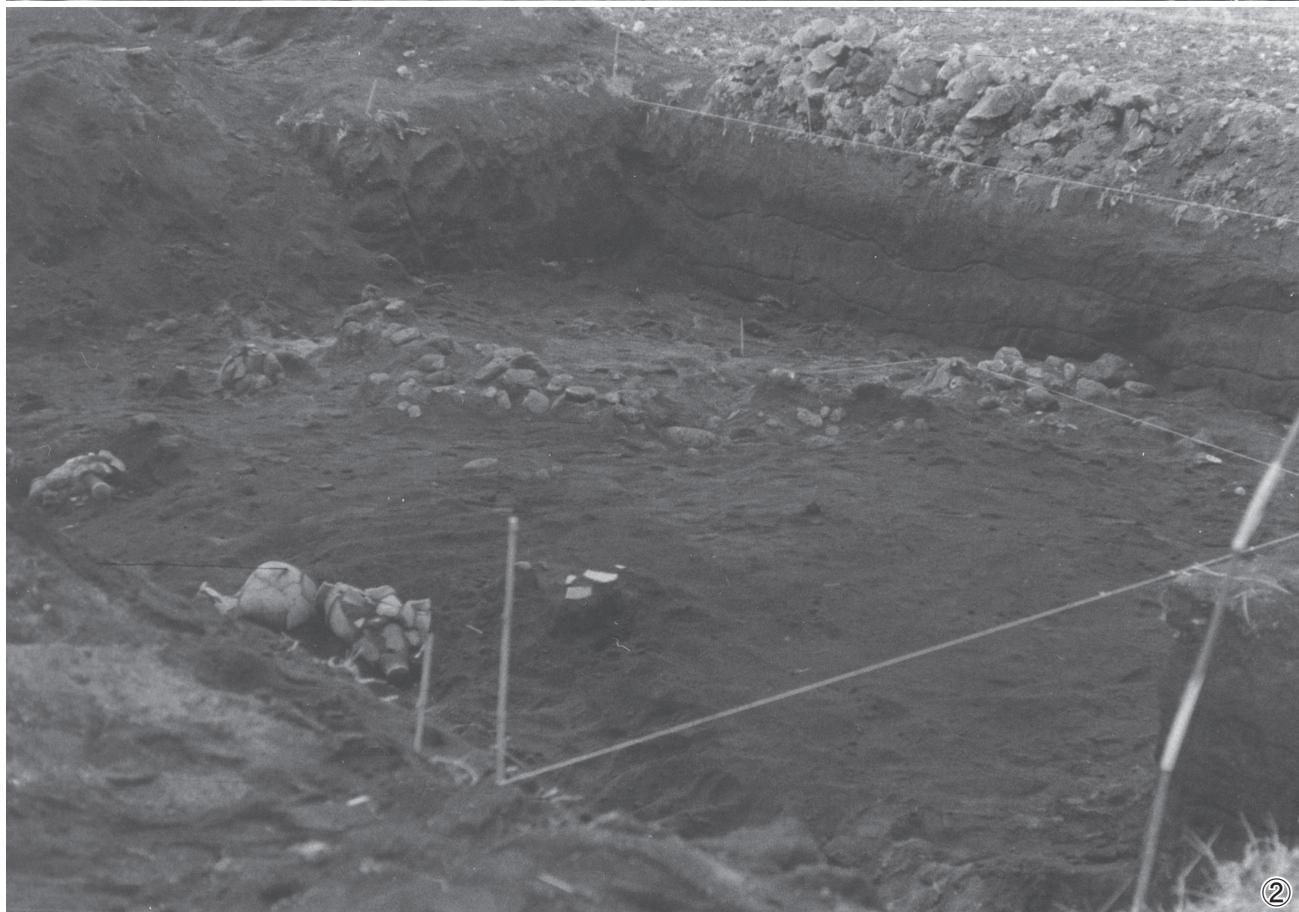


②

①調査当時の遺跡遠景（南東から） ②調査当時の遺跡遠景（南西から）



①



②

①B地点Ⅱトレンチ調査状況 ②B地点Ⅰ～Ⅲトレンチ調査状況

図版3 B地点調査状況②



①



②

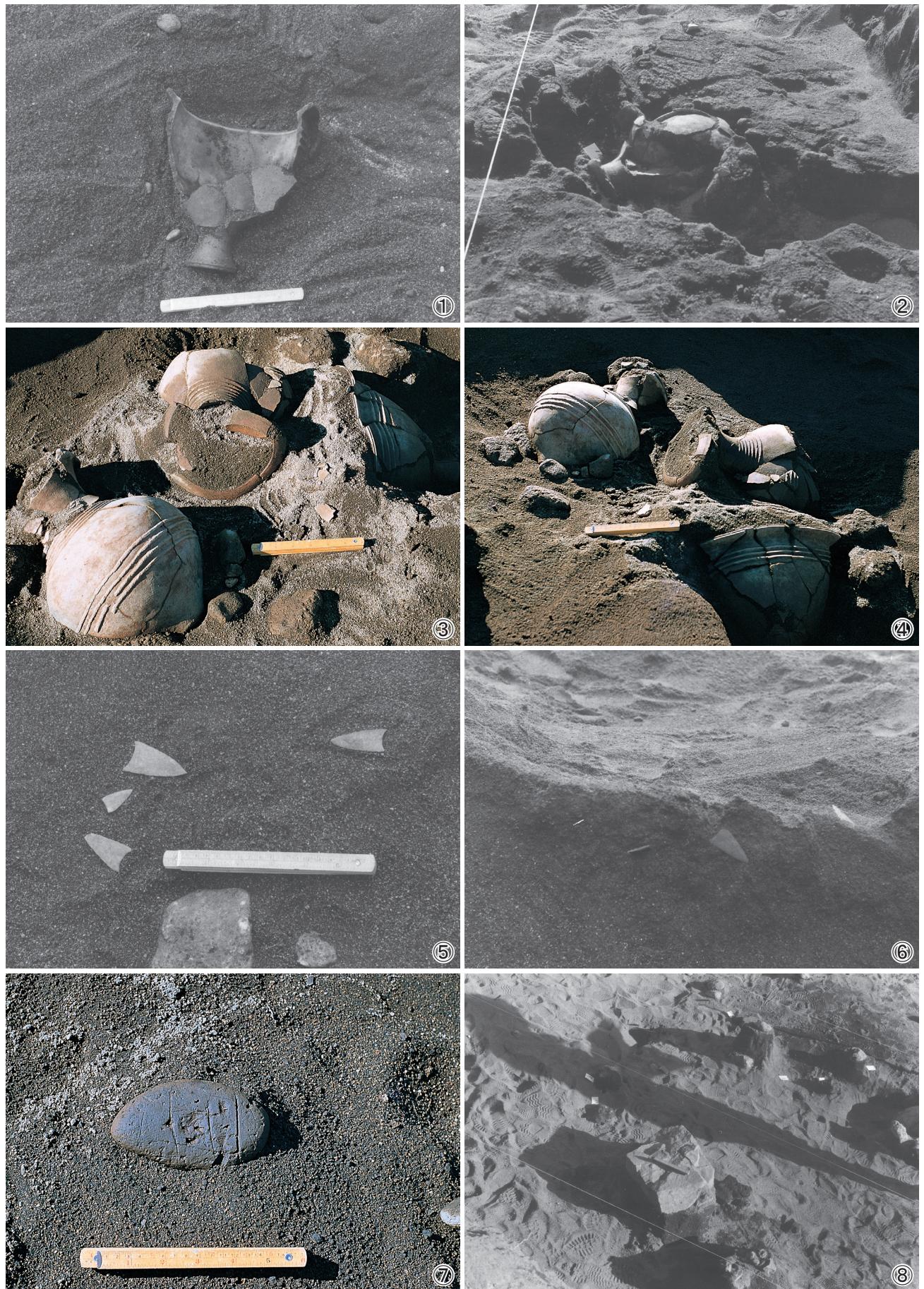
①B地点IVトレンチ拡張時調査状況 ②B地点環状配石検出状況

図版4
B地点遺物出土状況①



①②甕・壺(1・9)出土状況 ③④甕・壺(3・13)出土状況 ⑤甕・壺(7・12)出土状況
⑥甕(4)出土状況 ⑦甕・壺(14ほか)出土状況 ⑧甕(2)出土状況

図版5 B地点遺物出土状況②



①壺 (2) 出土状況 ②壺 (11) 出土状況 ③④壺・壺 (6・8・10) 出土状況
⑤10の直下出土石鏃 ⑥1の土器付近出土石鏃 ⑦軽石製品 (30) 出土状況 ⑧板石出土状況



①



②

①C 地点環状配石検出状況（北東から） ②C 地点環状配石検出状況（南東から）



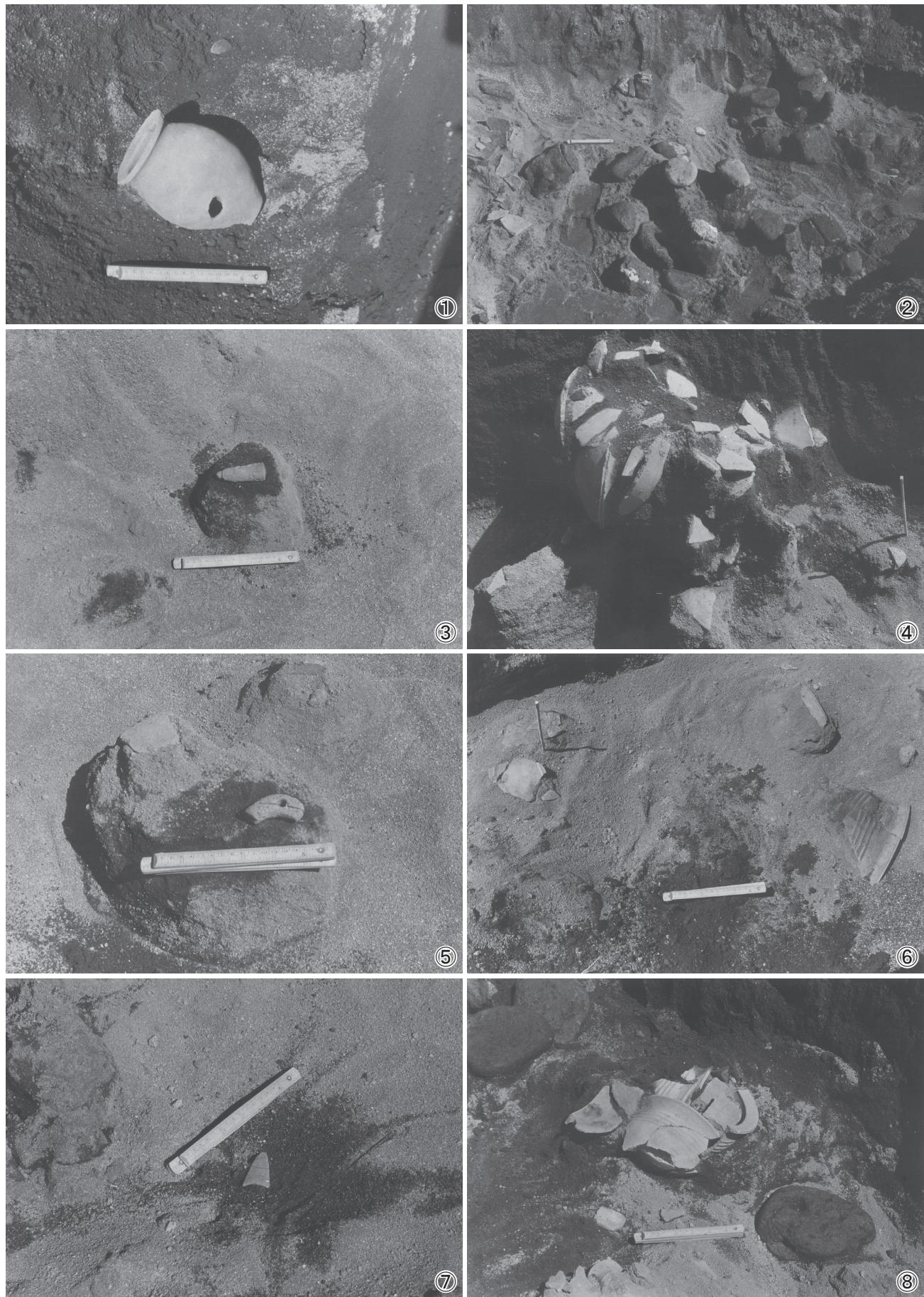
①



②

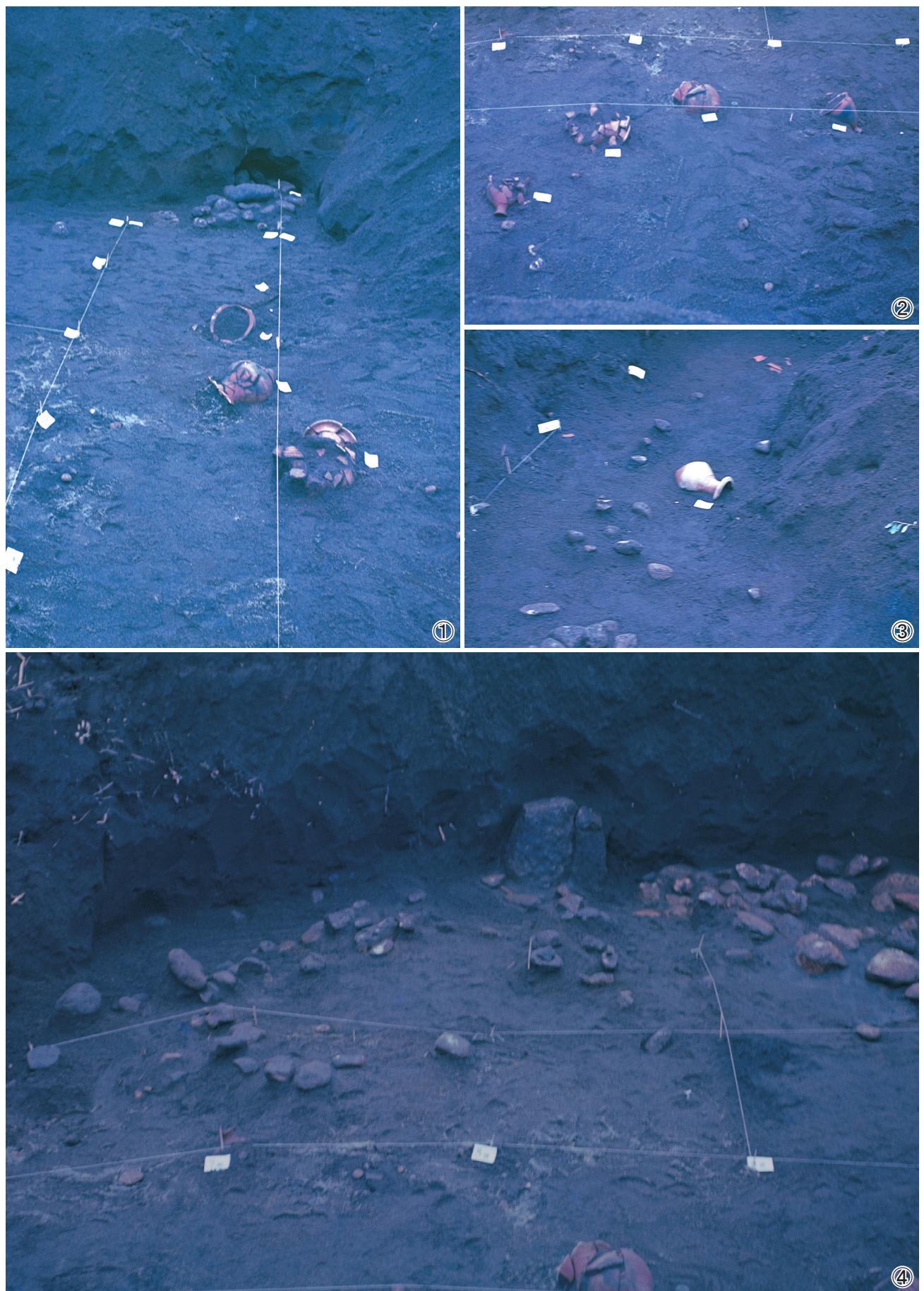
①C地点環状配石検出状況（南から） ②甕（40・41）出土状況

図版 8 C 地点遺物出土状況

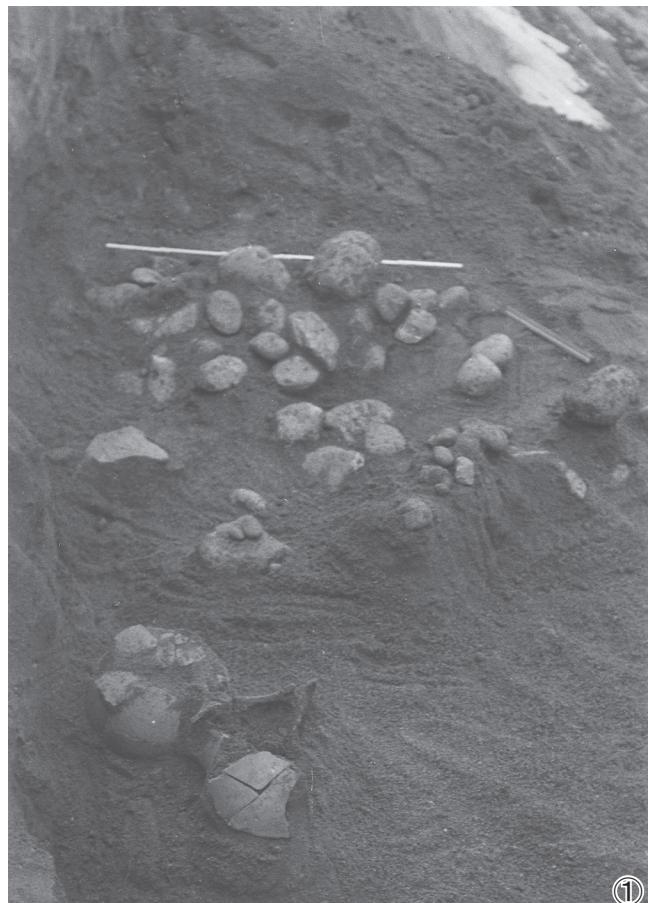


①壺 (45) 出土状況 ②I トレンチ 5 区軽石集積地検出状況 ③軽石製品 (52) 出土状況 ④壺 (46) 出土状況
⑤軽石製品 (51) 出土状況 ⑥甕 (44) 出土状況 ⑦石鏃 (48) 出土状況 ⑧甕 (43) 出土状況

図版 9 D 地点環状配石検出状況及び遺物出土状況



①②甕・壺(53・55・59ほか)出土状況 ③壺(54)出土状況 ④環状配石及び板石検出状況



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦

①軽石集積地検出状況 ②③板石取上状況 ④～⑦発掘調査風景



19
17 16
15 18



3



13



7



4



図版13 山ノ口遺跡出土遺物③

